人に、自然に、やさしい地域づくりを目指して

和と風と

2024.1.25

No.81

社会福祉法人　潤沢会
ワークステーション湯田・沢内
〒029-5612
岩手県和賀郡西和賀町沢内字大野13-28-4
TEL0197-85-2019　FAX0197-81-2015
編集委員会／鈴　木　晃　一
発　行　人／高　橋　典　成
印　　刷／鶴田印刷株式会社

令和五年　ワーク農園から

みんなで作った休憩所でひと休み

ここは岩手県西和賀町、奥羽山脈の山岳地帯に広がる小さな地域。その町の一角、地域の方々から借り受けている一町六反程の圃場が我がワークエリアである。

さて、我々の実働メンバーを紹介。入社一年目のK・Mさん。動き働くことを生きがいとしている紅一点S・Tさん。入社六年目となるが今年初めて圃場に足を踏み入れた私ことS・Kの三名なる老農夫・婦。そして、六名の施設のホープ集団。が、更になくてはならないのが農業指南書「絶品野菜づくり」と万能のスマホである。道に迷ったら本を、スマホをと、解決策を手探りしながらの営農生活である。これで良いのか疑問は残るが、これが実態なのだから仕方がない。

一年を振り返ってみる。山も緑に色づき始めた春四月。広々とした圃場を目の前にして腕を組み「さて、何から始めようか」と思案する。まず手を出したのはブルーベリーの剪定と施肥。ハサミ、脚立、肥料は準備した。しかし、剪定の仕方が解らない。昨夜スマホで予習したはずなのに、本番になると手が動かない。自分の感性に委ね、祈る思いでハサミを入れ、大収穫を夢見ながら肥料を撒いた。

五月、周りは緑一色となる。大忙しの一カ月がやって来た。冬の間に肥えた体をモデル並みにスッキリとさせてくれる健康農業の始まりだ。水稲はウルチ米とモチ米。野菜は十種類程。日々、額に汗をかきながら目まぐるしく畑を動き回った。ジャガイモの作付けはなんと種イモ百八キロ。我家は三キロ。

七月、三日連続の雨が降る。収穫を始めたピーマン畑が冠水状態となり絶句。おまけにクマの足跡もあちらこちらに・・・。八月、収穫の最盛期を迎える。ジャガイモ、ピーマン、トマト、キュウリ・・・作業の合間にちょっと一息。畑にカセットコンロと鍋を持ちこみ獲れたてのジャガイモ試食会。「うんめェ～」。休みもつかの間、秋獲りの大根の種蒔きは三千八百株。「ファイト一発!!」と気合を入れなおす。

九月、稲刈。ワーク産の新品種を早く食べてみたい。モチ米は昔由来のハセ掛け、天日干しの手作業。十月、半年余りの苦闘も終わりを告げる。しかし、来年の準備も怠ってはいけない。アスパラやブルーベリーには「お疲れ様!」と肥料を与え、雪に負けないようにと冬囲い。エトセトラ・・・以上。

忙しくも楽しくやれた気がする。モデル並みのスタイルには程遠いが。ホープ集団もよく頑張ってくれた。今年は類を見ない猛暑日の連続。草取りも我慢強くやってくれた。体調を崩す…ということもなく、コロナウィルスも寄せつけなかった。一人で出来ないことは二人で。会話も増え、作業内容もできることが増えた。小さな積み重ねが大きな一歩となった様だ。さて、今年はどこにどんな花を咲かせることが出来るか。天候、体調、歳に少々の不安はあるが、緑に輝く春を思い、雪解けを待ちたい。

（澁谷一幸）

「障がい者と住まい」

障害を持っていてもこの地で生きていくために、利用者がその人なりに地域で生活できるように支援することが私たち潤沢会の運営方針です。そのために最も重要なのが〝住まい〟です。以前から取り組んできたこの〝住まい〟のありかたについて考えてみたいと思います。

住宅改修

身体障がいがあっても自宅で暮らしたい。それは当然の思いです。上下肢に障害があり、通所施設を利用しているFさんは、今年八月に町の補助制度を活用し、生活するうえで一番困難であったトイレの改修工事を行いました。あわせて自分の部屋からの移動もスムーズにできるように修繕をし、今はとても満足をしているということでした。

Fさんも奥さんも、「できる限りこの家で暮らしていきたいので、ちょっと大変だと思ったけれど今回思い切って工事をしてよかった。」と話していました。自分が自分らしくいられる場所づくりのための決断であり、それを支援する制度があってのことだったと思います。

使いやすくなったFさんのトイレ

住まいのことに限らず、障がい者や高齢者向けの制度は多種多様にあります。それは、安全で快適な暮らしを維持するための力添えであり、「地域で暮らしたい」という気持ちに寄り添うものです。Fさんの住宅改修。上手に活用することができたら生活の質も大きく変わるという実例を見せてもらいました。

町営住宅

住む場所に困っている低額所得者などが活用する住宅として公営住宅があります。西和賀町では全体で60戸くらいの町営住宅が整備されています。

この町営住宅には優先して入居できる条件が定められており、障がい者や高齢者も条件を満たせば優先して入居できることになっています。ワークステーションの利用者も、何人かが町営住宅を利用しています。一番長い人では、二十年ほど前からの利用となっています。今まで快適に過ごしてきましたが、最近は障がいの進行や年齢のこともあって階段の上り下りなどが困難になってきました。

高床式の町営住宅

町営住宅の多くは高床式となっています。豪雪地帯ということもあって雪の処理がらくであることや、湿気対策などにも有効ということだと思いますが、優先的に入れるはずの障がい者や高齢者など身体の不自由な人にとっては、この階段が大きなバリアになってきつつあるように感じます。

障がいの重度化や高齢になって身体機能が衰えてきている方々にとっては、〝次の住まい〟の選択はいろいろあると思いますし、今後について私たち関係者として考えていかなければならないことではありますが、高齢者や障がい者が入りやすい公営住宅、という選択肢もあればいいのではないかと思っています。

グループホーム

ワークステーションでは、現在3カ所のグループホームを運営しています。湯川ハウス・高藤館、微助人の家、笑く和くハウスの3つで、定員はあわせて二十一人となります。

平成十四年にワークステーションが誕生。障がい者にとって充実した日中活動を送れる場ができました。しかし、さらに自立した生活を可能にするためには、居住する場が必要です。

この課題は、ワークステーション設立当初から考えられてきました。「和と風と」第2号では、「どうする保護者の高齢化」をテーマに、いわゆる「親なきあと」を支えるためにどうすればいいのかを、2人の保護者の思いを通して考え、グループホームの整備の必要性に至っています。

その対応は早く、法人では平成十五年に高藤館の開設にこぎ着けました。その後も二十六年に笑く和くハウスと湯本ハウス、翌二十九年に微助人の家を整備してきました。（湯本ハウスは令和四年三月閉鎖）

その中でも高藤館は、旅館を利用した温泉付きのグループホームです。最初の施設であり、利用者の暮らし方、職員の支援の在り方など、すべてが手探りでのスター

居住スペースは2階に

トでしたが、その後のグループホーム運営の基礎を作ってくれました。この高藤館も利用者の高齢化などにより、障がいの重い人にとっては使いづらさも見えてきました。居住階がほぼ2階になるので、上り下りも大変です。最近の猛暑で部屋にエアコンがないことなども、健康管理や安全面から心配になってきました。便利がすべてではありませんが、利用者の状況なども踏まえ、グループホームの今後の在り方について検討すべき時に来ていると感じています。

これからどうなる西和賀町

年末に国の研究機関である「国立社会保障・人口問題研究所」が公表した二〇五〇年の西和賀町の人口は、一九四〇人でした。あくまでも推計ではありますが、ショッキングな数字です。令和二年の人口より六割近くも減ることになります。

町でも以前から人口減少を食い止めるための様々な施策を行ってきていますし、国も危機感を持って対策に乗り出しているということですが、好転する兆しがないのが現状であり、国全体が人口減少と高齢化に向かうのは間違いないことです。

今でも人口減少は大きな問題になっており、様々な不安が生じてきています。過疎が進むと増える問題として、農地の維持管理ができない、農地や山林の管理ができず鳥獣の被害が増える、住宅の老朽化や空き家が増加する、集落の機能が低下するなどが言われていますが、身近な現実として感じることが多くなっているのではないでしょうか。また、豪雪地帯の西和賀町では雪対策、特に除雪の問題も大きくなってくると思います。

そうしたときに、「住まい」も含めた障がい者の課題もまた新たな段階に入ってくるのではないでしょうか。

地域共生社会の実現を

いま、「地域共生社会」という考え方が注目されています。制度・分野ごとの「縦割り」や「支え手」「受け手」という関係を超えて、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会の在り様だそうです。

これからは、人口が減少するにつれ一人ひとりの存在感がとても大きくなっていくと思います。ここで楽しく働き、ここで安心して生活し、可能な限りここで生き続ける。多くの人が望んでいるそういう生き方を、「支え手」と「受け手」というような関係性ではなく全体でサポートしていくような地域が実現できたら、人口減少はずっと緩やかになるのではないでしょうか。

私たちワークステーションは「障害を持っていてもこの地で生きていく」環境づくりに取り組んできました。先にも書いたように、「親なきあと」の利用者の将来を不安に思う保護者の方は多くいます。しかし、これからの時代は、障がいのあるなしにかかわらず一人ひとりが個人として尊重され、この地＝西和賀町で生きていくことに地域全体で関わる仕組みづくりがより大事になってくると思います。

地域共生社会の実現。そう簡単ではないでしょうが、一つひとつの取り組みに共生社会への意識を向けることで、新しい展開が開けてくるように感じています。いろいろな意味で転機を迎えているワークステーション湯田・沢内ですが、新たな視点で努力をしていきたいと思います。

畠山幸雄

「点描」

社会福祉法人潤沢会理事長
高橋　典成

スノーバスターズ三〇年

スノーバスターズが西和賀町でスタートしたのは平成五年一二月、三〇年前のことです。

岩手県内の積雪地帯（旧沢内村、旧湯田町、雫石町、松尾村、安代町）の五町村で同時スタートしました。岩手県スノーバスターズ連絡会を組織、沢内村社協に事務局を置き、全国的な情報交換を行いました。

ボランティアが全国的に普及したきっかけは、平成七年の阪神淡路大震災と言われていますが、スノーバスターズもボランティアの普及に大きな役割を果たしたと思います。

当時はボランティアというと婦人の活動が中心でしたが、スノーバスターズ発足以来、男性や小中高校生も参加するようになり、雪のない地帯からの応援隊が地域を越えて来てくれることも一般化したと思います。

ワークステーションスノーバスターズは、今年の冬も要望のある世帯に出向くことにしています。必要な方はぜひ声をかけてください。

続「風声」

潤沢会名誉会長
淑徳大学名誉教授
毎日新聞名誉職員
坂巻　熙

カネで幸せ　買える？買えない？

「経済、経済、経済」と、いま一番大事なこととして総理大臣が国会で連呼していました。

その経済。本来の語源は「経国済民」。つまり「国を治め、国民を救う」という意味。だが、その後の総理の言動を見ていると、経済とは、国民にカネをバラまくことだ、と思っているのではないか、と思えてくるのです。

いわく、減税します。給付金と補助金を出します。子供の学費も国が出しましょう。ガソリン代も補助します……等々。

自分のポケットのマネーならともかく、その財源は税金です。国の財政も、未来へのツケ回し。膨大な国債（借金）でまかなっていることはご存知の通りです。

日本は世界一、二の借金大国なのです。

そんな状況でもカネをバラ撒けば、国民が喜ぶ、とでも思っているのでしょうか。

そうでないことは現実の内閣支持率が物語っています。〝国民、世論をナメたらあかんぜよ〟（古いナア）です。

このカネさえ出せば、という考えが福祉の世界にも広がっている恐れはないでしょうか。

福祉は儲かる、と貧困ビジネスという言葉も生まれました。広辞苑で〝福祉〟を見ると福も祉も幸福の意味、とあります。

カネで幸福は買えるのか?。買えるという人もいるでしょう。だが僕は買えない派。

いま大切なことは、私たちの〝心の見直し〟カネのためなら何でもやる、という心の荒廃に終止符を打つことはできないでしょうか。他者を思いやる心、人と自然を愛する心、天地に恥じない生き方……。西和賀でそんな生き方をいや、偉そうなことを書きました。

お前はどうなのだ、と問われれば、ゴメンナサイ、ですが。

職員研修 ― 大信田康統さんに学ぶ

ワークステーションでは、十一月二十二日に職員研修会を開催しました。講師は盛岡市の大信田康統（おおしだ　やすのり）さんです。

大信田さんは盛岡市民福祉バンク事務局長、県身体障害者福祉協会事務局長など福祉関係の多くの仕事や役職を経験されてきた方です。ご自身が上下肢体幹に重度の障害があり、車椅子の利用者ですが、若い時から車の運転免許取得をはじめハンディを克服するためにがんばってこられました。研修会当日もお一人でプリウスを運転して、ワークステーションに来てくれました。

大信田さんのお話を熱心に聞く職員

研修会ではご自身の体験をふまえながら、障がいがあっても仕事をしたいという欲求を実現させてあげるのが大切であること、障がい者が地域活動にもっと参加する機会を持たせてあげるべきなどとお話しされました。また、職員から支援する上での留意点を聞かれ、利用者一人ひとりを大切にしてほしいということ、しかし、常識を外れているような言動に対しては叱っていい、障がいがあるからといって甘やかすようなことは良くないとアドバイスしていました。

私たち職員は、利用者さんとの接し方や支援の仕方について常に悩んでいます。大信田さんのお話で、支援する側とされる側という関係ではなく、人と人という関係性で接することの大切さを教えていただいたように思います。ちょっとした工夫と配慮で利用者さんの可能性をもっと引き出してあげたい、そんな思いを強くした研修会でした。大信田さん、ありがとうございました。

畠山　幸雄

一関 山桜桃の湯 研修旅行

数年お休みしていた研修旅行ですが、今年は2コースに分かれて実施することができました。1回目は、11月14日、一関の「山桜桃の湯」へ。

20周年記念式典で、朗読劇を演じた利用者さん。きっと、みんな出演を渋るに違いない、なんといってその気にさせようかと思案していた私たちをよそに、利用者さんはすんなり引き受けてくれました。聞けば作業中も職員を巻き込んで練習していたのだとか。嬉しい誤算でした。

そこで、この機会に役者さんの演じるお芝居を楽しんでもらおうとしたのが今回の企画。露天風呂など10種類以上の温泉につかった後は、天ぷらやお刺身などちょっと豪華な昼食。おなかを満たした後は、いよいよ芝居小屋風のお座敷で観劇です。人情物の時代劇。堂々とした迫力ある声と長セリフの連続に「さすが役者さん」と引き込まれました。涙もろくなるお年頃の職員はラストシーンについほろり。利用者さんも大笑いしたり拍手したり、一時間ほどの劇を満喫しました。「歌謡ショーも見たかったぁ」の声もありましたが、帰りが遅くなってしまうので残念ながら退席です。

省みれば、「もう少しお風呂でゆっくりさせてあげたかったなぁ」「歌謡ショーも見せてあげたかった」と残念に思うところはあります。それでも、行く一週間前から「一関楽しみにしてます。」と言って握手を求められ、帰ってきたら「楽しかったな」と言ってもらえて、町内ではなかなかできない体験をまた一つ積むことができました。

高橋　順子

豪華なランチを楽しむ参加者

思い出は分厚いステーキとりんごとお団子!?
～大迫ワイン工場見学コース～

この時期には珍しく晴天の青空が広がった11月21日（火）。利用者25名と大迫エーデルワイン工場見学コースに行きました。久々の遠出とお天気が素晴らしく、景色も良い！大迫に向かうバスの中では、みんなテンションが高かったです。大迫に着いてからの工場見学をしました。ワインが入ったたくさんの樽とビンを洗浄するための立派な機械にみんな驚いていました。そして、無料試飲のワインを少し飲んだWさん。初めてのお味に「すっぱ！」Wさんは家族へのお土産にワインを購入していました。そして、お待ちかねの昼食。この日は白金豚のステーキランチです。久々？のフォークとナイフに悪戦苦闘。でも、思っていた以上に厚みがあり、利用者も大満足。みんな口々に「美味しい！」を連発していました。それから紫波の産直に行き、お買い物。りんごやお団子を購入したり、ぶどうのソフトクリームを食べたりと楽しんでいました。帰りの車でもおしゃべりが止まらず、いいリフレッシュになったようです。

今回のお出かけの一番の目的は、まずは楽しんでもらうこと。ここ数年、我慢を強いてしまい、申し訳ない気持ちでした。行事をしないことは、私たちは「楽」なのかもしれない。それなら、利用者はただ仕事をするだけでいいのか。「何のために」私たちは働いているのか。この行事をきっかけに考えを少しでも見直さなければならないと思いました。

千葉　伶奈

工場職員の説明に聞き入る参加者

上手に食べてます

笑顔のハッピートーク No.47

五、六人の老女のグループが、コーヒー片手に「ムスメがコワイ」で盛り上がっています。通所リハビリセンターの昼下がり。

「電話もなしに突然やって来ては、ヤレ汚い。ヤレだらしない。こんなもの捨てないとゴミ屋敷になるんだから」と怒るのです。私には思い出があって大切なモノ。「死んだら捨てゝ処分して」と言えば、

「お母さんはリハビリで体を鍛えているから長生きしそう。ストレスの多い私の方が先に弱って動けなくなりそう。業者に片づけを頼むとするとすごくお金がかゝるんだから。その分残して逝ってくれるの？」ばり雑言をはきながら頼みもしない掃除をしている姿は実の娘とは言え「コワイ」。

帰りしなに「一人暮らしでは食べ切れないでしょうから半分もらっていくわ。お母さんの可愛い孫もハム大好きなんだから」とお歳暮でいただいた手も付けていないロースハムをばっさり。

「本当のことを言えば。ひざにだいた事もなく、お年玉の時期以外めったに顔を合わせる事もない反抗期の孫なんて、可愛いでしょうと言われても、返事のしようもないのよ。こゝだけの話だけどね。」

まわりの老女たちも口々に「ウチもそうよ、ムスメがコワイ」と納得顔。したり顔。息子ばかり三人。娘の欲しかった私……。心中複雑

相談役　坂巻潤子

グループホーム便り

11月の職員研修で　大信田康則さんからお聞きした話。重度の障害を持った車いすの利用者が、ウエスをはさみで切る時、わずかに動く手で布端を持つというだけの役割を任された。その日から彼は「自分が行かなくては」という使命感を持って、朝早く起き送迎車を心待ちにするようになったという。わずかに動く手が彼の生きる支えとなった。

忘れられない手がある。

Tさんは一昨年の1月から数か月笑く和くのショートを利用していた。長らく続く食欲不振の陰に大きな病が潜んでいることが判り、まもなく入院となった。ひと月余り経った頃病院の周りを車いすで散歩している姿を見かけた。声をかけようと近付いたが、短い間にひと回りも小さくなっていた。「この間家に帰ってきたよ。今日はアイスを食べた。ふた口ね。」と。あんなに好きだったアイスも二口がやっとだったのだ。「早く元気になってまた美味しい物食べよ。」と励ますことはもうできない。何か励みになる言葉をと探し思いついたのが「新しい仕事入ったよ。」と。一瞬目に力が入った様に見え、どんな作業か尋ねてきた。新しい作業が好きなTさん。タオルの袋入れもDMの封入作業もなんでもこなしてきた。別れ際「今度バリ取り（作業）やろう」と手を握って驚いた。小さくなっていく体とは裏腹にまるで病に抗うように、その手だけががっしりとした強さを持っていた。冬でも冷たい水で雑巾を絞って掃除をし、夏は汗だくになって草取りをした手だ。誰に誇るでもなく、ただただ当然のこととして働き続けてきた証。

残念ながらTさんは5月に帰らぬ人となった。2年経った今でも、草取りの勢い余って花苗まで抜いてしまい、照れ隠しに「わっはっは」と笑う姿が、あの時の手の感触とともに思い出される。何かとへまをやらかしてはTさんに叱られていた私だ。今の私の仕事ぶりもお見通しのことだろう。こわいこわい！（笑）

一人一人にそれぞれの手。その手に授けられたそれぞれの役割。

高橋順子

施設長敬白

ふるさと宅急便は、ワークステーションの重要な事業です。ワークで育てたお米や野菜、西和賀の産品も加えて年四回、全国各地の百五十名ほどの会員の皆さんに発送しています。

十二月便は二十一日に発送しましたが、猛暑の今年は野菜の出来が悪く、数を確保するのが大変でした。種まきから草取り、収穫まで苦労して作業をしたのですが、一部は応援をいただいて間に合わせました。もち米も着色米が多く、加工をお願いしている団平さんに丁寧に精米してもらい、きれいなお餅に仕上げていただきました。

発送日は民生委員、保護者のボランティアも駆けつけて、利用者、職員総出での作業です。みんなが忙しく立ち回るこの瞬間が最高。一つひとつの品をていねいに詰め込みます。会員さんには福祉作業所時代から継続している方も。四十年以上も私たちを応援してくれているのはすごいことです。

ふるさと宅急便がつないでくれるものは心と心。ワークステーションのみんなの思いを込めて品物をお届けし、受け取る人は、遠い岩手で働く利用者の姿を思ってくれているのです

施設長　畠山　幸雄

編集後記

コロナのこともあり自粛という名の我慢が多かったここ数年でしたが、少しずつ以前のように行事をやり、盛り上がる利用者たちの楽しそうな姿が見られて嬉しい限りです。今年は、もっとたくさんの笑顔や楽しい思い出などを皆さんにもお届けできればなと思います。

鈴木　晃一